

# タナーの死

## —『審判の日』ノート

米山 益巳

### I

若くして逝った南部作家フラナリー・オコナー（1925-1964）の文字通り最後の一篇として知られている『審判の日』（“Judgment Day”）の主人公・タナーは、次のように叙された姿をもってこの世を去る。

食料品店から帰ってきた娘がタナーを見つけた。帽子が顔の上に引きずりおろされ、頭と両腕が手すりの支柱の間から突き出ていた。両足はまるで足かせをはめられ、さらし台にさらされた人さながらに、吹き抜けにぶら下がっていた。

住みなれた南部はジョージアを後にして、北部は大都会・ニューヨークにやってき、娘夫婦のもとでくらしていたタナーは「鳩小屋」同然のアパートで孤独感を一人かこつている。そんなある日、「30年」に亘って「つきあい」のあった黒人の「友」・コールマン（Coleman）の待っている、なつかしの故郷に再び帰ろうと決意する。娘が食料品の買出しに出かけると、「興奮して身を震わせながら」タナーも部屋を出る。しかし不運にも足を踏み外し、「急な階段」を中途まで転げ落ちる。それもなんと逆さまに。そこに隣室に住む「俳優」を生業とした黒人がやってくる。タナーは「助けてくれ、牧師さん。故郷に帰るとこなんだ」と言って声をかける（—「牧師さん」なる呼称については後述する）。その挙句の果てが如上の光景にあいなったという訳だ。黒人はタナーの願いを叶えるどころか、タナーが被っていた帽子を引きずりおろし、かてて加えてタナーを突き落としてしまったのだ。「きちんと死でもって終わらない物語を、あるいはその予示をもって終わらないような物語を私には想像できない」<sup>(1)</sup>とまで言ったことのあるオコナーにあって、死のモチーフはその言辞に違わず頻出しているモチーフではあるのだが、タナーの最期を描いたゴシックまがいの、異形の相をおびたこの姿形は、その無惨さにおいてとりわけ際立っている。

そのむごさの程についてはおそらく語り手も十分意識していたに違いない。先の引用部からそう遠くない物語結びの一節において、娘は父親・タナーをその願いに反してニューヨークに埋葬したがため、心の平安が得られず、夜になっても寝付くことができなくなり、そのため顔に「深いしわ」ができ始めたのだが、しばらくして故郷のコリンスに埋葬し直したため、しわも消えうせて、今では以前の「美しい顔」に「殆ど」戻っていた、という風にいささか滑稽味の漂ったそんな文章を配しているのは、娘が曲がりなりにも「良心」を持っていたことを伝えるためであったということ以上に、タナーの死の姿がいやでも喚起する、その暗澹たる重苦しさを多少なりとも和らげるためではなかったのか。つまりは、それほどまでにタナーの死の様態には、これ見よがしのむごい描写が施されていると言いたいのである。

そのことを良く知るべく、脱獄囚による一家6人の殺害が描かれた、秀作『善人はなかなかいない』（“A Good Man Is Hard To Find”）における「祖母」の死を挙げてみることにしよう。周知の通り、祖母の死もなんとも残酷なものではあった。息子夫婦も、そしてその子供達も射ち殺され、最後に一人だけ残されていた祖母も、やがて「思想家」然とした自称「ミスフィット」なる人物の放った3発の銃弾を胸に浴びる。そして「血だまり」の中、「座ったような、横たわったような」恰好を呈して息絶える。黒人への差別意識を心の底に沈潜させ、「レイデイ」である己の命は金で買えるものと思い込んでいる「俗人」の末路として、この「処罰」が相応しいか否かという問題はしばらく措くが、容赦のない厳しい制裁が加えられていることは明らかだ。しかし、にもかかわらず祖母の死体は暗色一色で塗りつぶされているのでは決してない。「血だまり」の中とはいえ、祖母は「子供がするように足を組み、微笑を浮かべながら雲ひとつない空を見上げていた」のであるから。「頭」が「一瞬澄み切った」時、ミスフィットを「自分の子供の一人」とみなした祖母は、死の直前に罪が拭われ、帰するところ救済されるに至ったのだ。子供のように足を組んだ祖母の足が、それを境に‘twisted’から‘crossed’に変えられているのも、かつてベラミイが説いた通り理由のないことではない。<sup>2)</sup>「3」発の銃弾が聖性をおびた数値であるのもおそらく偶然ではない。「雲ひとつない空」を見上げて浮かべている祖母のその笑みは、恩寵の祝福を受けた喜びの笑みそのものなのだ。魂を再生、変容させ、「善人」になりえたその時が少々遅きに失した感こそ否めないが、ともあれ、祖母の死の姿がタナーのそれと内実において大いに異なることは疑いをいれない。要するに、哀れにもタナーの最期の姿には祖母に与えられたその救いのひとカケラも見出せないということである。

そのことにあずかっているものは、死体の見せている姿形だけではない。タナーの死体の置かれた、その場所のありようのことだ。そこは、「日の光さえささない」、「明か

りのない急な階段」だ。念を押すには及ぶまいがオコナー文学において「光」は、しばしば「神のシンボル」<sup>(3)</sup>として機能しているものだが、その「光」がここにはおよそ欠如している。とは即ち、タナーが「祖母」(『善人はなかなかいない』)はおろか、『良き田舎人』(“Good Country People”)のあのジョイ・ハルガにすらなりえていないということである。信じるものは神ならぬ「無」であると言ってはばからない、「木製」<sup>(4)</sup>の魂を持った、「哲学博士」のハルガでさえ、「これまで信じてきたものは何一つとしてない」と言い放つ聖書の「セールスマン」、「背の高いやせこけた」マンリー・ポインターによって受ける屈辱を契機に再生し、かくして「日の光」を浴びることができえたのだが、タナーには神の恩寵の具現たる「光」がついにおとずれない。暗い階段は、『高く昇って一点へ』(“Everything That Rises Must Converge”)におけるジュリアンの母親、チェスニイ夫人のこれまた最期の姿を圍繞するその暗い闇にも似ている。

黒人の子供に「ぴかぴか光る1セント銅貨」を与えようとしたチェスニイ夫人は、子供の母親の激しい怒りをかうことになる。「私の子はひとさまから金は貰わないんだよ」と叫びながらその母親がチェスニイ夫人を殴りつけたのは、夫人の恩着せがましい慈悲心に、優越感を隠したその傲慢な態度に耐えられなかったからだ。舗道に倒れた夫人は「重い体」を起こして歩き始める。それも「よろめくような」足どりで。やがて力尽きて再び道に倒れこむ。その時のチェスニイ夫人を覆っていたものが他ならぬ「闇の潮」であった(一因みに、偽りの「リベラリスト」にして母親への愛をも欠落させていたその息子・ジュリアンも同じく「闇の潮」に包まれている)。タナーがジュリアンの母親と結びつくのは、光の不在という一点においてのみではないのだが(一例えば、両者はそろって「心地よい」甘美な過去の思い出において生きていた。ジュリアンの母親にとってのかつての乳母・キャロラインは、タナーにとってのコールマンである)、今はそのことに深く立ち入る場ではない、論題を戻そう。

タナーという人物が同情するに値する人物であったことを考え合わせれば、この救いのなさは、やはり問うてしかるべき問題ではないのか。思わず、同情するに値すると言ったがおそらくこれには異論はでまい。住み慣れた南部の田舎をあとにし、ニューヨークの娘夫婦のアパートで暮らす、余命いくばくもない老いた人間、それがタナーであった。そんな老人が娘のアパートを「鳩小屋」と言い、人間の住むところではないと思うのは、まあ自然だろう。そして「地下鉄」にも「エレベーター」にも二度と乗りたくないと思うのも自然なら、一人窓辺に座り、外を眺めながら寂しさに打ちのめされているのも、これまたさもありなん。こんなことになるんだったら、「黒人に仕える白い肌の黒人」となって、「酒」を造っていた方がむしろまじだったと後悔し、「生きていようが死んでいようが」コリンズに行き着くことはもはやないだろうと思いつつも、「主は

わが牧者なり」とつぶやきをもらし、「私の死体を見つけた方は、着払い至急便にてジョージア州コリンズのコールマン・パラムのもと7に移送されたし」と記した、「なんとか」読める「震えた筆跡」のメモをピンでとめ、故郷に向けて一人密かに旅立つのも、哀れさを催させこそすれ、なした行為として理解不能なところはまずないだろう。

このように見てくれば、同情さるべき素地には何一つ欠ける所がない、とすら言いたくもなろうというものだ。しかし、その実「同情的」<sup>6)</sup>には一向描かれていない。タナーの最期を叙した先の結末部の一節を見ればその冷やかかさ加減は一目瞭然だろう。「期待の地平」はそれこそ一顧だにされず、ただただ手厳しく断罪されている。そこにあらわに呈されているものは、何あろうおぞましき地獄への「転落図像」<sup>6)</sup>ではないのか。アイロニカルにも、「ここ」(ニューヨーク)に埋葬するなら「地獄」の業火で焼き殺されるぞ、と語気荒く娘を脅していた当のタナーが、あにはからんや墮地獄の断罪を、墮地獄の「審判」を受けているというありさま。まさしく、「旧約」は「箴言」(第28章、18節)の説く「曲がった道を歩む者」の末路さながらに。このテキストの要は、ある種のノイズと言えなくもない、一見してのこの齟齬、不調和感に存しているのではないのか。

## II

一体、タナーなる人物はいかなる類の人物であったのだろうか。いや、端的に問うことにしよう。果たしてタナーは真実、断罪とは無縁の人物として存在していたのだろうか、と。そもそもタナーがニューヨークに移り住むことになったその経緯からして、実は論難さるべき意識をさらけ出してはいなかったろうか。改めて精査してみるにしくはない。ニューヨークにやってきたのは、黒人の血の混じった「黒人にとっての何でも屋」、<sup>7)</sup>「薬剤師」にして「葬儀屋」、<sup>8)</sup>「弁護士」にして「不動産屋」のフォレイに、「無断居住者」として勝手に住み着いていたその土地から出て行くか、それとも「蒸留器」で酒を造るかと迫られた時、白人である自分が黒人のために働くことなど思いもよらないことだと思ったからではなかったのか。白人が黒人のために働くなどということは、政府はまだ強制していないんだ」とフォレイに言い返しているのもいつにそのためだ。念のために言い添えるがこの差別意識は、黒人のコールマンと長年月に亘り住居を共にしてきたこととも、なんら矛盾するものではない。なぜなら、いかに親しくとも、コールマンが白人ならぬ黒人であることには少しも変わらないのだから。事実、コールマンはタナーのベッドの足元に、と言うより床の上にじかに置かれた粗末な「わら布団」(“pallet”)で寝

ていたのであって、「ベッド」で寝ていたのでは断じてない。フォークナーの『あの夕陽』(“That Evening Sun”)の一コマを思い起こさせる、すぐれてシンボリックな事象たるくだんの「わら布団」がコールマンのベッドであったのだ(一夫のジーザスに殺されることを恐れ「小屋」に帰れないナンシーは、コンプソン家に泊まるべく「わら布団」を与えられていた)。「カラー・ライン」(“color line”)は見紛うことなくそこに存在している。かつて、樹皮を削って作った「メガネ」をコールマンにかけさせたのも、理由は只一つ、目の前にいる人間が、黒人であるコールマンが従うべき白人であることを知らしめるためであった。「メガネ」をかけたコールマンに、「何が見えるか」とタナーは聞くのだが、その後こんなやり取りが続く。

「男が見える」

「どんな男だ」

「このメガネを作った人」

「白人か、それとも黒人か」

「白人。そうです、白人です」

(中略)

「そうならそのことをわきまえた接し方をせい」

この見紛うことなき差別意識は、父親が黒人と同じ「小屋」でくらしていることに驚き、それを激しく非難する「誇り高き」娘の意識となんら選ぶところがない。

かくある意識は、ニューヨークに来て以降、幾ばくかなりとも変化を見せるに至ったのだろうか。『審判の日』の10年前に発表された、同じくタナーを主人公として語られている『東部の異邦人』(“An Exile In The East”) (一ほんの一例にしかすぎないが、隣の部屋に黒人が入居したことを知ったタナーは、「黒人を隣人に持つように育てたつもりはない」と娘に言って嫌悪感を露にしている)、あるいはさらにその10年前、アイオワ大学の大学院在学中に書かれたオコナーにとっての最初期の一篇『ゼラニウム』(“The Geranium”)程ではなくとも(一これまた一例だが、後にタナー像へと進展してゆくダッドレイは、同じアパートに住む黒人に親しげに挨拶されたことに激しい憤りをおぼえている)、依然として差別意識には歴然たるものがあると言わざるをえないだろう。隣人となった俳優業の黒人にいきなり「ジョン」と呼びかけたのは措くとしても、「牧師さん」と「南部風」に呼びかけたのはその最たる例だ。しかも娘に北部の黒人は南部の黒人ではない、近づいて親しくなるとはいけない、と告げられていたにもかかわらずの悪しき所業。タナーはニューヨークにあっても、南部のハイエラキーという旧コ

一丁の有効性をみじんも疑わなかったのである。物語の冒頭部に、アパートの窓の外で舞っている雪への言及箇所があるが、タナーの「衰えた視力」ではそれを知ることはできなかつたと語られているのも、どこやら意義深く響いてこようというものだ。しかし、それにしてもタナーへの処罰はいささか過度ではないだろうか。その厳しさにりっぱに相当する、重い罪を犯した極悪人、それがタナーであったなどと一体言えるのだろうか。

タナーは、実に「信仰心」さえ持ち合わせていた人物だった。「地獄への恐怖」から、銃を持ってはいても人を殺したことは一度としてなく（一立ち退きを言ってきたフォレイも殺そうと思えば殺すこともできたのだがそうはしなかつた、と記されている）、キリストをも神をも言下に否定する黒人俳優の「不敬」なる言葉には、驚愕を覚えて、「心臓」をまるで「オークの節」のようにかたくさせ、そして「審判の日」の存在を信じ、そればかりかその日を夢にまで見ている人物であった。にもかかわらずのこの処罰。それらはずいぶん免罪符にはなりえなかつたということになる。誤解のないよう言うておくが、このアンバランスをとらえて、黒人俳優の怒りに説得力がないなどと言いたいのではない。無神論者であるのに「牧師さん」と声をかけられたばかりでなく、皮膚の色ゆえ“coal man”と言われたと思ひ込んでしまったその黒人が、タナーに侮辱されたと考えたとして少しも奇異なことではないだろう。そのように思えば定めし怒りにもかられようというもの。その尋常ならざる怒りとて、俳優の個人的な理由を超え出た、黒人という「人種」がこれまで蒙ってきた積年の憎しみ、積年の「怒り」<sup>17</sup>の噴出でもあったと解するならば、納得できなくはないはずだ。だが、これで問題はきれいに片づいたなどと早まった判断を下してはならない。タナーの死体の見せているその凄まじき様相には、積年の「憎しみ」、「怒り」とは次元を少々異にした別種の意味が込められているはずなのだ。そのような「憎しみ」、そして「怒り」の観点から、タナーを称してスケープゴートと言うのは正しいだろう。しかし、タナーはスケープゴートの何たるかを明かすために設定された人物などではもとよりない。ここで読者は改めて確認しておく必要がある。このテキストが他ならぬフラナリー・オコナーという、「信仰」に生きた希有なる南部作家の残したテキストであることを。そうである以上、オコナーの文学世界にしかと据えられ前景を領している、月並みならぬその烈しい倫理規範を、倫理意識をないがしろにする訳にはゆかないことを。

### III

3発の銃弾を浴びてこの世を去る「祖母」（『善人はなかなかいない』）は、極悪人などでは全くなかつた。「事故」に見まわられた際、自分の遺体を目にした人に「すぐさま」

この自分が「レイデイ」であったことが分かるようにと、「におい袋」までつけて着飾ってゆくそのあさましき虚栄心は、成る程確かに俗人のものではあろう。しかしそれをもって極悪人だなどと一体誰が言おうか。「掘っ立て小屋」の前に、ズボンをはいていない黒人の子供が立っているのを見て、貧しさのためにズボンすらはけないことを十分知りながら、その「かわいらしさ」に心を動かされ、「描けるものなら絵に描くのに」などと思っているのは、人種を異にした黒人の貧しさは、所詮「垣根の向こう側」（『高く昇って一点へ』）の「他者」の問題とみなす、れっきとした差別意識の表れではあろうが、これを称して極悪人の証しであるなどと断ずる人が、果たしてどこにいるだろうか。タナーと同じく、黒人に暴力をふるわれるジュリアンの母親（『高く昇って一点へ』）とて、殴り倒されたそのうえに、死にまで至らしめられる程の、いかなる非道なことをなしたというのだろうか。しかし、この種の、言ってよければ凡庸な疑問は、まさしく凡庸であることによって少なくともわがオコナーの抱いた疑問ではなかった。オコナーが問うているのは、そこで犯されている罪の軽重などでは毛頭ないのだから。自分の犯しているその罪に向きつかない、悦にいったひとりよがり、鈍磨したその精神構造、歪んだ魂のありようをこそ問うているのだから。「詰まるどころ、救われるか、断罪されるか」<sup>(8)</sup> そのいずれかであると言っていたオコナーにとり、それは容赦なく断罪されてしかるべきものとしてあったのである。「頭」のかたい「人間を現実に取り戻し、恩寵の受け入れに備える」のに、「暴力」<sup>(9)</sup> 以上に有効なものはないと固く信じていたオコナーにすれば、祖母が銃弾を浴びてたおれることも、あるいはタナーが階段から突き落とされて死にゆくことも、なんら異とするには足りぬことであったのだ。「暴力」のモチーフがオコナー「詩学」の基軸に位置しているのは、この有効性への全き信奉があればこそであった。しかし、ここでもまた早計は厳に慎まねばならない。暴力は、神の恵みが、恩寵が得られることを保障しているということではいささかもない。現に、祖母に下ったその恩寵がジュリアンの母には、そしてタナーには無縁のものであったのだから。くどいようだが、暴力によって「来世の入り口」<sup>(10)</sup> に立たされることは、恩寵にあずかるの謂いでは必ずしもない。

祖母が救済されたのは、あくまでも、「深い所に根差す同族の絆」によって、脱獄囚のミスフィットと自分が結ばれてい、自分がミスフィットに対して「責任」<sup>(11)</sup> があることを「最期」に悟ったからである。そのような意識の再生に遠く至らなかったのがジュリアンの母であり、またタナーであった。それ故に、二人にはついにいかなる救いも訪れなかったのだ。タナーがコールマンと初めて出会った場面が想起するに値するのは、いわばその経緯を、かくある命運を免れ得なかったその所以をつまびらかにしているからである。「お前さん、目がよくないんじゃないのか」、と言ってペンナイフで「50セン

ト硬貨」程の穴をあけ、「針金」をつけて樹皮の「メガネ」を作り上げたタナーは、それをコールマンに手渡し、かけてみると言う。柔順至極なコールマンは、言われたとおりにそれをかけ、そしてタナーを見つめる。その時—

彼（タナー）は、一瞬自分の陰面を見ているかのような気がした。まるで、道化にして捕らわれの身であることが、自分達が共に有した運命でもあるかのような、そんな気が。しかし、その幻想は、はっきり解説できないうちにどこかに消え去ってしまった。

「道化にして捕らわれの身」であることの、その意味を捉え損ねたタナーは、とどのつまり「道化」を演じ、「捕らわれの身」となって無惨に死に果てるしかなかったのである。酷い死は、免れ得ないその正当なる代価であった。「共に有した運命」のなんたるかを解することなく、「メガネ」越しに見える人間が「高み」に存在する白人種であることを、得々とコールマンに論じたタナーと、黒人俳優を一度ならず「牧師さん」と呼んで平然としているタナーとは無論別人ではない。差別意識をついに払拭できない、どこまでも同一の罪人であった。

不幸にして、“visionary”たる「タービン夫人」（『啓示』）とは異なり、「一瞬」の「幻想」は、タナーをして覚醒させ、そして再生させるに足る喜ばしき「啓示」と化すことはなかったのである。その罪科は、オコナーにとっては、許しがたい重い罪障としてあったのだ。タナーの最期の身体が放っている、異様なまでの酷い姿の出処はそれを措いて他にはないだろう。曲折こそあれ、タナーは故郷・コリンスに帰れた、よってタナーは「救済されている」<sup>(12)</sup>などと安易に考えてはならない。オコナーの文学世界が、もっぱら「罪人」の救済に至る道を描き上げ、「光明」を灯してこと足れりとしているのではないことを、このテキストはよく伝えている。

(註)

- (1) Quoted in Ruth M. Vande Kieft, "Judgment in the Fiction of Flannery O'Connor" in *Sewanee Review*, 76 (Spring, 1968) ,p.345.
- (2) Michael O. Bellamy, 'Everything off Balance: Protestant Election in Flannery O'Connor's " A Good Man Is Hard To Find"' in *A Good Man Is Hard To Find* (ed.) Frederic Asals (Rutgers Univ. Press,1993) ,p.108.
- (3) J. H. McMullers, *Writing against God* ( Mercer Univ. Press, 1996) ,p.33.
- (4) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners* ( Farrar , Straus & Giroux,1957 ) ,p.99.
- (5) Frederick Asals, *Flannery O'Connor: The Imagination of Extremity* (The Univ. of Georgia Press, 1982) ,p.141.



- (6) 小池寿子『描かれた身体』（青土社・2002年）116頁を参照。
- (7) Richard Giannone, *Flannery O'Connor and the Mystery of Love* (Fordom Univ. Press, 1999) , p.243.
- (8) Flannery O'Connor, *The Habit of Being* (Vintage Books, 1980) ,p.350.
- (9) *Mystery and Manners*, p.112.
- (10) Ibid.,p.114.
- (11) Ibid.,pp.111-112.
- (12) Carter W. Martin, *The True Country*. (Vanderbilt Univ. Press, 1968) ,p.28.

（“Judgment Day” のテキストは「初版」と若干異なる「改訂版」*Flannery O'Connor . Collected Works* < The Library of America , 1988>所収のものを使用していることを断っておく）

（本学教授）